

発言



認知症と共に暮らせる社会を

上野秀樹 千葉大学医学部付属病院特任准教授

世界で高齢化が最も進んでいる日本では、認知症の人が急増している。そして、最近認知症に関する大きなニュースがマスコミをにぎわせている。増え続ける認知症の問題に関して、私たちはどのように考えていけばいいのだろうか。

高齢化が最も大きな危険因子である認知症に残念ながら完全な予防法や治療法はない。誰でも高齢になればなるほど、認知症にかかってしまう可能性が高まる。私たちが認知症

になるのをおそれているだけでは、この問題は解決できない。私たちが今すべきことは認知症になっても生き生きと暮らせるような社会をつくることだ。

それはいったいどういう社会なのだろうか。認知症は、もの忘れや判断力低下のために社会生活や日常生活に支障を来すようになった状態のことをいう。認知症の人は、私たちの社会で暮らしにくさを感じているのだ。

ここで、認知症の人の暮らしにくさを考えてみよう。例えば、認知症の人が行きたい場所に行くことができず迷っていると、「徘徊」とよばれてしまう。しかし、五体満足で普通の能力を持った「普通の人」でも大都市の複雑な地下鉄の乗り換えに迷ってしまい、なかなか目的地にたどり着けないことがある。

また、認知症の人が心ない人にだまされて大切な財産を奪われてしまふことがある。だが「普通の人」が

認知症になると高齢化による身体機能障害(身体障害)、認知機能障害(知的障害)、一部の人には行動・心理症状(精神障害)と従来の分類による3障害すべてが出現する可能性がある。このようにさまざまな状態となりうる認知症の人を支えるには、介護や医療だけではなく、行政や地域の力等々、あらゆる社会資源を総動員すること、多くの人の英知を結集することが必要になる。

これからの問題がいくつも浮かび上がってくるだろう。中には解決不可能に思えてしまう問題があるかもしれない。しかし、こうした問題一つ一つを私たち一人一人が自分ごととしてとらえ、ていねいに解決していくことが、認知症の人が暮らしやすい社会の実現、ひいては私たち自身が暮らしやすい社会の実現につながる。

問題解決のポイントは何だろうか。それは、私たち一人一人が認知症をより深く理解すること、そして認知症の当事者が抱えている思い、意見を大切にして、社会のあり方を変えていくことだ。

認知症の人が暮らしやすい社会をつくるため、当事者中心の施策の立案が求められている。

……

うえの・ひでき 社会福祉法人口ザリオの聖母会・海上療養所医師、内閣府障害者政策委員会委員。